ビリー・ジーン・コリンズ著、アダ・タガー・コヘン日本語版監修、山本孟訳『ヒッタイトの歴史と文化—前 2 千年紀の忘れられた帝国への扉』（リトン、2021 年）

青島忠一朗

本書はヒッタイト学の碩学の一人である B. J. コリンズ氏が著した概説書を山本孟氏が A. T. コヘン氏の監修のもと翻訳したものである。ヒッタイトは鉄を生み出し、カデシュでエジプト軍と激しい戦いを繰り広げ、海の民によって滅ぼされた王国としてよく知られている。しかし、日本語で読める概説書はほとんどなく、詳しい歴史やその文化についてはあまり知られていないと思われる。本書はヒッタイト王国だけではなく、王国滅亡後にその後継者を自任した新ヒッタイト諸王国を含めた約 1000 年にわたる「ヒッタイト」の歴史・社会・文化を包括的かつ簡潔に概説したものであり、とくに初学者にとっては必読の書と言って差し支えないであろう。本書は 5 つの章から構成される。

第 1 章の「ヒッタイト研究史の概説」では、ヒッタイト王国の都ハットゥシャ（現ボアズキョイ）の発見とその発掘にはじまり、ハットゥシャ出土の粘土板に記されたヒッタイト語の解読、そして粘土板の出版状況およびハットゥシャとそれ以外のヒッタイトの都市の発掘調査と文字史料の出土状況が語られる。

第 2 章の「ヒッタイトの政治史」では、ヒッタイト王国形成以前のアナトリアの状況とヒッタイト人の起源について論じられた後、前 2 千年紀後半の王国の形成期から古王国時代、最盛期を迎える帝国時代、そして前 1200 年頃の王国滅亡までのヒッタイト王国の歴史と王国滅亡後に北シリアを中心として興隆した新ヒッタイト諸王国の歴史の概要が述べられ、ヒッタイト王国と新ヒッタイト諸王国との連続性の問題が論じられる。

第 3 章の「社会」は、「統治」、「法と社会」、「美術」、そして「文学」に焦点を当てている。「統治」ではヒッタイトの王権とそれを支える行政機構、「法と社会」ではヒッタイトの社会経済構造およびヒッタイトの法について解説される。「美術」では、ヤズルカヤのレリーフやハットゥシャのライオン像に代表される自然の岩や切石を利用したヒッタイトの彫刻美術が主に紹介される。「文学」では年代記や王令などに見られる歴史記述の発展の概略が示された後、神話と祈祷文書が

簡潔な内容とともに紹介されている。

第 4 章の「宗教」ではヒッタイトの神々、儀礼や祭、神殿などの礼拝の場、そしてそれらに携わった神官職について概説される。これに加え、宗教に関したいくつかの項目、すなわち占い、祈祷、罪と穢れ、呪術、起源論や死生観などに焦点が当てられる。

第 5 章の「聖書の中の「ヒッタイト人」」は、聖書に言及される「ヘト人」がヒッタイト人と同一視できるかという問題を論じ、ヒッタイト人が聖書世界に影響を与えた可能性について考察する。

本書はいくつかの項目に関して補説を設けて詳述し、英語文献のみになるが、「理解を深めるための参考文献」を挙げており、初学者にとって親切な設計となっている。また概説書としては注が多く、主要文献と最新の研究が紹介されているため、研究者にとっても有意義なものとなるだろう。なお、訳者の山本氏がヒッタイト学の振興を目的として運営する「ヒッタイトの世界」（https://www.hittiteanejphy.com/）では、ヒッタイト王国の歴史を簡潔にまとめており、本書でも扱われているムルシリ 2 世の祈祷の日本語訳も掲載している。本書とあわせて一読することをお勧めしたい。

これまで日本語で読めるヒッタイトの包括的な概説書はほとんどなく、本書が日本のヒッタイト学の更なる発展に貢献することは明白である。しかし、著者が「あとがき」でヒッタイト世界のより深い理解が聖書世界のより深い理解につながると述べ、本書の様々な個所でヒッタイトの世界と聖書世界との類似に言及するように、本書はヒッタイトのみならず、旧約聖書を研究する者にとっても重要な 1 冊となるであろう。